Q&A 肺炎球菌：あなたが知っておくべきこと

2025年春号
第3巻

多くの人たちは、肺炎球菌 (pneumococcus) と呼ばれる細菌に関して考えることはなくても、その影響についてはよく知っているかもしれません。幼い子どもを持つ親であれば、少なくとも1回はお子さんの耳の感染症に苦労した経験があるでしょう。肺炎球菌は、幼い子どもにおける耳の感染症の3大原因菌の1つです。同様に、高齢者や、親の介護をする成人した子どもは、一見快方に向かっているように見えた呼吸器感染症が突然悪化したり、「肺炎になった」ことに慣れているかもしれません。この「急激な悪化」は、インフルエンザなどのウイルス感染後の免疫低下に乗じて肺炎球菌が肺に侵入し、重度の肺炎を引き起こす、肺炎球菌の日和見感染の性質に起因することが一般的です。この連続感染のシナリオこそが、インフルエンザの時期に多くの高齢者が肺炎で亡くなる理由であり、この高リスク集団を守るためにインフルエンザワクチンと肺炎球菌ワクチンの両方が重要である理由です。

Q. 肺炎球菌疾患とはなんですか？
A. 肺炎球菌感染症は肺炎連鎖球菌として知られる細菌グループが原因となっています。いくつかの種類の肺炎球菌が存在し、その多くがヒトの感染症を引き起こします。肺炎球菌は耳、副鼻腔、脳、脊髄（髄膜炎）、肺（肺炎）または血流（敗血症）の感染症の原因となることがあります。

Q. 肺炎球菌疾患はどんな症状を認めますか？
A. 肺炎球菌疾患の症状は感染部位によって様々であり、咳、息切れ、胸痛、発熱、血性粘膜、耳痛、頭痛または項部硬直（首のこわばり）が含まれることがあります。

Q. 肺炎球菌疾患は危険ですか？
A. 大半の肺炎球菌感染症は軽症です。ただし、中には重篤であったり、命に係わるものさえあります。副鼻腔と耳の感染症は最も軽症のものに属します。髄膜炎、敗血症および肺炎は、より重症となる傾向があります。重症感染症を起こしやすいのは、幼い子ども、 高齢者、そしてリスクを高める病状や状況に置かれた10歳代や成人です。詳しくは「誰が肺炎球菌ワクチンの接種を受けるべきですか？」をご覧ください。

Q. 肺炎球菌ワクチンはどのように製造されていますか？
A. 肺炎球菌ワクチンは糖で覆われた（多糖体）肺炎球菌を使用して製造されています。多糖体ワクチンと結合型ワクチンという、2種類の肺炎球菌ワクチンが入手可能です。ワクチンは、防御する肺炎球菌タイプの数と、「ヘルパー」蛋白の有無という、2つの重要な点が異なっています。

肺炎球菌多糖体ワクチン (PPSV)
多糖体肺炎球菌ワクチン（PPSV23と呼ばれることが多い）は、23の肺炎球菌タイプを防御し、「ヘルパー」蛋白を含みません。2歳未満の小児は多糖体への強い免疫反応を生じないため、乳幼児へのPPSV23の接種は通常推奨されていません。このワクチンは成人には、より有効ですが、このバージョンを勧められるのは一部の人に限られ、全ての場合において結合型ワクチンの接種も勧められます。

肺炎球菌結合型ワクチン (PCV)
肺炎球菌結合型ワクチン（PCV）には、多糖類に付着（結合）した「ヘルパー」タンパク質が含まれています。当初、PCVワクチンは7種類の肺炎球菌を予防するもので、PCV7として知られていました。その後、13価ワクチン（PCV13） がPCV7に取って代わりました。2025年には、PCV13は15種類、20種類、21種類の肺炎球菌を予防する3種類の肺炎球菌結合型ワクチン（それぞれPCV15、PCV20、PCV21）に置き換えられました。

続く

Children's Hospital of Philadelphia®
Vaccine Education Center

詳細情報：vaccine.chop.edu

Q&A 肺炎球菌：あなたが知っておくべきこと

Q. 誰が肺炎球菌ワクチンの接種を受けるべきですか？
A. 肺炎球菌ワクチンは2歳未満の全ての小児と、50歳以上の全ての成人に推奨されます。さらに、2歳から49歳までの一部の人、具体的には心臓、肝臓または肺に慢性疾患（喘息を含む）を有する人、糖尿病、癌、HIVまたは他の免疫低下症状を有する人、喫煙やアルコール依存症のある人などは、肺炎球菌感染のリスクが高くなる状態にあるため、このワクチンの接種が推奨されています。上記の推奨は年齢と状況に基づいているため、あなたやお子さんに肺炎球菌ワクチンが必要であるか、もし必要な場合は、どの種類を、何回、いつ接種すべきかを医療従事者と相談してください。

Q. 誰が肺炎球菌ワクチンの接種を避けるべきですか？
A. ワクチンの成分に重症のアレルギー反応がある人は、接種しないよう推奨される可能性がありますが、このワクチンの相対的な危険性と利益について医療従事者と相談してください。

Q. どの程度の頻度で肺炎球菌ワクチンの接種を受けるべきですか？
A. 乳幼児はPCV15またはPCV20ワクチンを2ヵ月、4ヵ月、6ヵ月、12〜15ヵ月の間に4回接種します。以前に肺炎球菌ワクチンを接種していない50歳以上の成人は、PCV15を1回接種した後にPPSV23を1回接種するか（多くは1年後）、PCV20を1回接種するか、PCV21を1回接種します。過去に肺炎球菌ワクチンを接種したことのある成人は、推奨される接種量について医療従事者と相談してください。さらに、高リスクの小児および2〜49歳の成人は、推奨回数について医療従事者に相談する必要があります。

Q. 両方の種類の肺炎球菌ワクチンの接種を受ける必要がありますか？
A. 多糖体肺炎球菌ワクチンと結合型肺炎球菌ワクチンの両方が必要かどうかは、ワクチン接種歴や健康状態によって異なります。あなたの状況に合わせてどのようなワクチン接種計画が推奨されるか、医療従事者に相談してください。

Q. 許容できる最長接種間隔はどのくらいですか？
A. ワクチンの接種間隔に上限はありません。成人の場合、結合型ワクチンと多糖体ワクチンの接種間隔は、限られた状況を除き、少なくとも1年以上あける必要があります。あなたの状況に応じて最適な接種のタイミングや順番を決めるために、医療従事者に相談してください。

Q. 肺炎球菌による肺炎の既往があっても、肺炎球菌ワクチンの接種を受けるべきですか？
A. はい。既に肺炎球菌による肺炎に罹患したことがあっても、多くの肺炎球菌タイプが感染の原因となるため、肺炎球菌ワクチンの接種を受けることが推奨されます。ある種類の肺炎球菌に罹患したとしても、別の種類の肺炎球菌から守られるとは限りません。

Q. 肺炎球菌ワクチンの接種を受ける危険性と利益はなんですか？
A. ワクチンは、接種部位の発赤、疼痛、腫脹、発熱または筋肉痛を生じることがあります。肺炎球菌による感染症は、入院や死亡の原因となる可能性があるため、ワクチン接種の利益は明らかに危険性を上回ります。

この情報は*Children's Hospital of Philadelphia*の*Vaccine Education Center*によって提供されています。当センターは親御様や医療専門家の方々のための教育情報源であり、感染症の研究および防止に注力する科学者や医師、および親御様から構成されています。*Vaccine Education Center*は*Children's Hospital of Philadelphia*の基金教授陣よって資金提供されています。当センターは製薬会社からの援助を受けていません。The Center gratefully acknowledges Yukitsugu Nakamura, Hiroyuki Aiba, Tomohiro Katsuta for translation of this information. *©2025 Children's Hospital of Philadelphia.* 無断複写・転載を禁じます。*25308-03-25.*

Children's Hospital of Philadelphia®
Vaccine Education Center

詳細情報：vaccine.chop.edu